

4. 学生による国際交流*¹

錦織 宏*²

1. はじめに

21世紀のグローバル化の潮流を受け、国境を超えた交流が増えつつある今日は、まさに“*It's a small world.*”の時代である。医学界も例外ではなく、国際交流の機会は年々増えてきており、医療者が国際的な視野を持つことの重要性はかつてないほどに高まりつつある¹⁾。そのような状況は医学教育にも一定の影響を与えてきており、その一つに、医学生が海外で臨床実習^{2, 3)}や研究活動⁴⁾を行う機会が増えてきている現状がある。本稿では国際的にも増えつつある医学生の国際交流の現状と課題について、特に卒前教育における臨床教育の内容を中心に述べる。

2. 日本における医学生の国際交流の状況

教育現場にいと、海外での臨床実習に参加したという学生や短期研究留学に行ってきたという医学生を散見するが、2010年2月現在、日本の医学生の国際交流に関する全国規模のデータは存在しない。ただ、所属する大学が提携している海外の大学に留学したり、教員の個人的なつながりを通して海外に渡航したりしている学生は一定数いる^{5, 6)}。また、医学生が海外での臨床教育を受けることのできる、大学と独立した国際交流プログラムもいくつか存在する。医学教育振興財団は過去20年にわたって4週間の英国における臨床実習プログラムを運営してきた⁷⁾。米国財団法人野口医学研究所はトーマスジェファーソン大学や

ハワイ大学において、1週間のPBLワークショップを企画している⁸⁾。また、医学生が主体となって運営している国際交流の組織の一つに、国際医学生連盟 (International Federation of Medical Students' Associations; 以下IFMSA) がある⁹⁾。100ヶ国、200万人を超える医学生を代表する組織であるIFMSAには日本支部も存在するが、この組織の活動の一つが交換留学であり、海外での基礎医学研究や臨床実習の機会を提供する仲介を行うとともに、海外からの医学生の受け入れの窓口業務を行っている。

また近年、日本で臨床実習を行う海外の医学生を見かける機会もある^{7, 10)}。欧州医学教育学会の医学生の国際交流に関するセッションでは、日本で臨床実習を行う際には言葉の壁が大きいという議論もあるが¹¹⁾、実際の現場では英語の堪能な日本の医学生や教員が海外からの医学生に対応していることが多い¹⁰⁾。

3. 海外での医学生の国際交流の状況

米国における国外臨床実習の歴史は数十年にも及び、その学生の割合は、1978年には全体のわずか5.9%だったものが、2004年には22.3%にまで増加している¹²⁾。また英国では70~90%の医学生が一定期間、国外で臨床実習を行っている²⁾。一般的に欧米諸国における国外での臨床実習では、その渡航先が発展途上国であることが多く²⁾、この点は、主に欧米へ渡航を希望する日本の医学生と大きく異なる^{5, 6)}。看護教育の分野では、先進国よりも発展途上国に渡航した方が、国際的な視点の獲得といった長期的なインパクトの観点からはより教育効果があったとする報告もある¹³⁾。また、発展途上国の医学生が欧米などの先進国で臨床実習を受ける場合は、それが頭脳流出の引き

*¹ International Electives for Medical Students

*² Hiroshi NISHIGORI 東京大学医学教育国際協力研究センター

金になるという議論もある³⁾。

4. 国際交流のカリキュラムの企画・運営

医学生の間際交流のカリキュラムに関して、その学習アウトカムやあるべき教育環境・評価法などについては、あまりまだ明確になっていない¹⁾。学習アウトカムに関して、日本人および英国人医学生を対象にした研究からは、「病歴と身体所見を重視した臨床推論」「自国ではあまり見ない疾患の診断と治療」「臨床倫理」「医療制度」「医師患者関係」「労働倫理」「医学教育」「一般的な文化」「個人的な成長」が抽出されている⁷⁾が、渡航前にこのような学習目標を明確にしておくとい¹⁴⁾。また教育環境に関しても、渡航前に十分な打ち合わせを行い、自国と滞在国双方の指導医を明確に決めておくことが望ましい¹⁴⁾。評価法については、国外での臨床実習において振り返り日記をつけることが推奨されており¹⁴⁾、それを用いたポートフォリオ評価が、診療業務における学習者評価 (Work-based assessment) の観点からも妥当である¹⁵⁾。

5. おわりに

グローバル化の潮流の中、大学医学部は医学生の間際交流の機会をより多く提供していく必要性に迫られている¹²⁾。各大学が海外のより多くの大学と協定を結び、学生の間際交流を活発化させることが求められる^{12, 14)}。また日本においては、先進国のみならず発展途上国との間際交流の機会をより増やすことも課題の一つであろう。さらに、海外から日本にやってくる医学生への教育の機会を増やしてそれを充実化させることも、先進国としての日本の医学教育の重要な役割ではないだろうか。

■文 献

- 1) Mutchnick IS, Moyer CA, Stern DT. Expanding the boundaries of medical education : evidence for cross-cultural exchanges. *Acad Med* 2003 ; **78** : S1-5.
- 2) Miranda JJ, Yudkin JS, Willott C. International Health Electives : Four years of experience. *Travel Med Infect Dis* 2005 ; **3** : 133-41.
- 3) Gupta R, Farmer PE. International electives : maximizing the opportunity to learn and contribute. *Med Gen Med* 2005 ; **7** : 78.
- 4) 狩野光伸. 医学部でリサーチマインドを育てるには?—東京大学医学部 MD 研究者育成プログラムの試み. 週刊医学界新聞 2009 Nov 16. 第 2855 号.
- 5) 津村圭, 荒川哲男, 吉川純一, 向井梨恵, 本田裕美, 高岡志帆. 卒前海外臨床実習と学生による支援組織. 医学教育 2005 ; **36** (1) : 23-6.
- 6) 柵山年和, 福島統, 山崎洋二. 海外選択制臨床実習の効果と問題点. 医学教育 2004 ; **35** (2) : 105-9.
- 7) Nishigori H, Otani T, Uchino M, Plint S, Ban N. I came, I saw, I reflected : a qualitative study into learning outcomes of international electives for Japanese and British medical students. *Medical Teacher* 2009 ; **31** : e196-e201.
- 8) 海外留学のススメ. 週刊医学界新聞 2006 Jan 16. 第 2666 号.
- 9) IFMSA-JAPAN. [Online]. [Accessed 26 February 2010] ; Available from : <http://ifmsajp/>
- 10) 西城卓也. 交換留学の研究. 私信. 2008.
- 11) Short Communication : International medical education, and the Bologna Declaration. *AMEE 2005 Programme* 2005 ; **2** : 62.
- 12) Drain PK, Primack A, Hunt DD, Fawzi WW, Holmes KK, Gardner P. Global health in medical education : a call for more training and opportunities. *Acad Med* 2007 ; **82** : 226-30.
- 13) Thompson K, Boore J, Deeny P. A comparison of an international experience for nursing students in developed and developing countries. *Int J Nurs Stud* 2000 ; **37** : 481-92.
- 14) Balandin S, Lincoln M, Sen R, Wilkins DP, Trembath D. Twelve tips for effective international clinical placements. *Med Teach* 2007 ; **29** : 872-7.
- 15) Davis MH, Ponnampereuma DW. Work-based assessment. In : Dent JA and Harden RM. *A Practical Guide for Medical Teachers*. Third Edition. Elsevier, New York, 2009, p.341-8